

果てしなき宇宙：超絶主義思想と天文学

高橋， 勤
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1786385>

出版情報：英語英文学論叢．62， pp.1-18， 2012-03-27．九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：



果てしなき宇宙

— 超絶主義思想と天文学 —

高橋 勤

ヘンリー・ソローは『ウォールデン』の最終章「結論」において、人間の豊かな内面世界とその可能性を神話的な次元に高めて描いている。その一例として挙げられたのがクーラーの芸術家の場合であり、美の観念が芸術家の身体を超えて永遠性を獲得する過程が描かれていた。いわば、そこにおいて語られたのは個人の精神や観念性が時間と空間を超越するという超絶主義的な構図であった。

内面世界の無限の拡大という、このロマン主義的言説を19世紀における科学の進展、特に天文学の急速な進歩と関連づけて論じることにはできないだろうか。近代天文学による宇宙空間の発見と自己の内面性の創出を平行して考察し、宇宙の広がりが人間精神の存在とその可能性を示唆するメタファーとして機能した経緯を指摘したいのである。

1 天文学の進展

ハーヴァード天文台

人類による宇宙の発見が科学技術の発達と密接に関連していたことは異論の余地がなかろう。特に近代天文学の進展は望遠鏡をめぐる技術の競争と、その技術によって獲得される知識の集積と独占によるものであったと言える。その一つの典型的な例をアメリカの天文学の歴史に見ることができる。

アメリカの天文学は19世紀に飛躍的な進歩を遂げている。アメリカにおける天文学の歴史は浅く、1820年代までアメリカには天文台すら存在しなかったのだが、それ以降、半世紀というきわめて短期間のうちに、世界をリードする研究成果を産み出すまでに成長する。その拠点のひとつがハーヴァード大学天文台であった。

ハーヴァード天文台が創設されたのは1839年である。当初は設備らしい設備もなく、台長ウィリアム・C・ボンド（1798－1859）が手さぐり状態で研究を行っていたのだが、46年に天文台が正式に創設され、翌

47年にはアメリカでも最大規模の15インチ型望遠鏡が配置されている。¹ いわば、ソローがウォールデンの森で生活し、エマソンが超絶主義者との知的交流を続けた時代にハーヴァードの天文台は創成されたのであった。それ以降、ハーヴァードの観測天文学は急速に進展し、わずか数年の間に世界に先駆けて天体写真の技術を獲得するまでに到っている。その後、ハーヴァード大学天文台はボンドの息子ジョージに引き継がれ、19世紀末にはエドワード・ピカリングがペルーのアレキープに24インチのブルース望遠鏡を配備して世界をリードするようになる。² 20世紀前半から中盤にかけてハーロウ・シャプリーがその志を継いでハーヴァード天文台を観測天文学のメッカとしたのである。

47年に新しく設置された望遠鏡について、エマソンは「ケンブリッジの望遠鏡」と日記に言及している（『エマソン日記十』114）。³ 天文学に深い関心を抱き、イタリアのフィレンツェに収色顕微鏡の発明者ジョヴァンニ・バティスタ・アミチを訪ねたこともあるエマソンにとって、ハーヴァード天文台の望遠鏡の設置は注目すべき出来事であったのだ。

いっぽう、ソローは、1851年7月9日にハーヴァード大学天文台を実際に訪れ、台長のボンドと話している。

ハーヴァードの天文台を訪ねた。ボンドの話によると、ワシントンでは星のカタログを作成しているとのこと？ いや、しようとしている。ケンブリッジ（ハーヴァード大学の所在地）ではやらないらしい。かれらの望遠鏡の性能では無理だそうだ。拡大観察を行なうだけの性能を備えていないのである。小さな望遠鏡でなにかやれることはあるのかと訊ねると、そりゃあ、あるさ、望遠鏡を使わなくても観察できることはたくさんある、たとえば、星の明るさの変化等々。もちろん、いい目をもった観察者がやればの話だが、そんな答えが返ってきた。——天文学者の立場から見て、裸眼がいまだ重

1 Howard N. Plotkin, "Harvard College Observatory," *History of Astronomy: An Encyclopedia*, Ed. John Lankford (New York: Garland, 1997) 252-3.

2 Plotkin, 253.

3 *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, 12 vols. Ed. Edward W. Emerson (Boston: Houghton, 1903-4). エマソンの著作に関する言及はこの版に依るものとし、本文中に巻数と頁数を付した。

要視されていることを知るのは愉快的なことだった。([『日記三』 296-7)⁴

ここでも天文学の研究において望遠鏡の精度と規模の大きさがいかに根本的な問題であったかが指摘されている。この一節は、天体観察に対するソローの関心の強さを示すばかりでなく、ソローの思想、そして当時の天文学の方法論等を知るうえで示唆に富んだ記述であった。たとえば、望遠鏡による天体観察と裸眼での星の観察との対比について、1854年3月12日の日記の中でもこうくり返されている。

天文台の数は増えているが、天体にはほとんど注意が向けられてはいないという有り様である。望遠鏡で武装した者たちよりも、肉眼の方がたやすく遠くまで見通せるからである。その目を通して誰が観察するかが問題なのである。人間の目以上にすばらしい望遠鏡など作られてはいない。大きな望遠鏡を使えば、拡大率も大きいがブレも大きい。詩人の目であれば、その美しき飛翔によって地上から天上へ一気に駆けめぐるのだが、天文学者の目にはそんなことはありえない。その目は天文台のドーム屋根からさらに遠くを見渡すことはないのである。天体の目に見える現象に比べると、科学的な説明というやつはつまらぬ、取るに足りないもののように思われる。人間の目こそ本当の星の発見者であり、流星ハンターなのである。([『日記四』 471)

天文学という近代科学に対するソローの批判的な姿勢については後でさらに詳しく述べるとして、ここではいったん所長のボンドとの会話に話を戻そう。というのも、そこには当時の天文学の傾向を知るうえで貴重な指摘がなされているからである。ひとつは、星の分類（カタログ）ということ、もう一方は星の明るさの観測ということであり、こうした作業は、おもにイギリスの天文学者ウィリアム・ハーシェルとその息子ジョン・F・W・ハーシェルによって確立された手法だった。

4 ソローの日記への言及についてはプリンストン版に依るものとし、本文中に巻数と頁数を付した。

エマソンとハーシェル

ウィリアム・ハーシェルとジョン・ハーシェルは、18世紀後半から19世紀にかけて活躍したもっとも偉大な天文学者であった。父ウィリアムは、1781年の天王星の発見によって広く知られているが、その功績には数々の星雲や連星の発見と研究、太陽の黒点や月のクレーターを観測などが挙げられ、巨大な望遠鏡を用いた徹底した観測と星の体系的な研究によって知られている。⁵ また、息子のジョンは南アフリカに観測所を設けて、南半球の星の分類と体系化を試みた。ジョンの数々の著作の中にはホメロスの『イリヤス』の翻訳も含まれ、文学に対する関心が深かったことを窺わせる。従来の天文学者の関心がおもに太陽系の星の位置と運動にあったことを考えると、ハーシェル父子の天文学上の最大の貢献は太陽系を超えた宇宙の果てしない空間を研究し体系づけようと試みたことだと言えるだろう。もしここで、こうした天文学上の発見とアメリカ文学史との接点を見出すとすれば、それはハーシェル父子がエマソンの思想の展開に決定的な影響を与えたという事実であった。

エマソンはハーヴァード在学中に、すでにウィリアム・ハーシェルの著作に親しんでおり、1821年（エマソン18歳）の日記にそのもっとも早い言及が見られる。さらに、同時代人であったジョン・ハーシェルについて、エマソンは南半球の星の分類に関して知的な金字塔として称賛し、『英国気質』（*English Traits*）のなかで次のように紹介している。

ジョン・ハーシェル卿は、北半球の星のカタログを作成した父上の仕事を完成すべく、みずから喜望峰に赴いて数年間過ごし、南天のカタログを完成させ、帰国後、さらに八年間をかけて論考をまとめあげたのである。その仕事の価値は三十年という歳月を経てようやく注目され始め、以後、歴史に残る最も重要な記録と見なされるに至ったのである。（『エマソン全集五』90）

5 ハーシェル父子の伝記的事実と功績については以下の文献を参照した。*The Cambridge Illustrated History of Astronomy*, Ed. Michael Hoskin (Cambridge: CUP, 1997) 231-252; Lloyd Motz and Jefferson Hane Weaver, *The Story of Astronomy* (New York: Plenum Press, 1995) 159-184.

エマソンの思想に決定的な影響を与えたのは、ジョン・ハーシェルの2冊の著作、『自然哲学序説』(*A Preliminary Discourse on Natural Philosophy*, 1831)と『天文学論』(*Treatise on Astronomy*, 1833)であった。1832年に『自然哲学序説』を読んだエマソンは、その感動を「まさに、真実は小説より奇なり」と日記に記していた。

天文学の発見に比べると、われわれが想像力によって創り出したものなど取るに足りぬものであろう。ハーシェルやサマヴィルほどにわれわれを驚かし高揚させるものが、ミルトンの『失樂園』のなかに描かれていると言えるだろうか。観察された事象の途方もない空間と時間、それと対照をなす観察者の卑小さ。あたかも卵の殻(註 天文台のドーム屋根)をつけた目が宇宙の中を漂っているようなものだ。(中略)カルヴィン主義者あるいは無神論者でいられる者などこの世にいるだろうか。神は、われらが神学を正し精神を教化すべく、こうした知識をわれらに開示されたのである。(『エマソン日記四』24)

エマソンはハーシェルの知性と学識を尊敬したばかりではなく、学者としてのあらゆる美德をハーシェルのなかに見出していた。ハーシェルの著作がエマソンの思想に与えた影響については次節で述べることにして、ここではソローと天文学の関係に目を転じてみよう。

天文学と占星術

ハーシェルに対するエマソンの熱烈な傾倒とは対照的に、ソローの著作のなかにはハーシェル父子への言及は見られない。いやハーシェルどころか、ガリレオ以降発達を遂げた天文学への言及はほとんど見られないのである。ソローと天文学の関係を詳しく調べた小野和人は、天体への深い関心にもかかわらず、ソローは「近代天文学の成果に対してはむしろ冷ややかであり、天文学者に対しても批判的であった」と述べている。⁶ 天文学にかぎらず、ソローが近代科学の方法論に対してきわめて

6 小野和人「ヘンリー・ソローの宇宙意識」『英語英文学論叢』第53集(九州大学、2003)6頁。

懐疑的な視線を投げかけたことは事実であつたろう。

『ウォールデン』の中には、人々の多くは「星を天文学的にではなく、せいぜい占星術的に読む」という一文が記されている(104)。⁷ じっさい、ソローは天体観察についても天文学と占星術を対比的に捉えており、非科学的とも言える占星術の価値を強調するのである。

天体は、一般にわれわれの天文学同様干涸びたつまらぬ事実の集積に見えてしまう。つまり、単なる星の集団であり、後者について言えば、そのカタログである。天の川(ミルキーウェイ)はミルクを産み出さないのだ。距離や尺度など驚嘆すべき数字を挙げながら、科学の中にはいくらか興味深い話もあるにはあるが、そこには星と人間の関係についてはほとんど書かれていない。たとえば、土地の測量や航海には役立つかもしれないが、人生の方向の決め方は教えてくれないのである。いっぽう、占星術はこれよりも崇高な真実をうむ可能性を秘めている。星座というものは天文学者よりも馬車の御者にとって意味があり、本当に神聖なこともありうるのだ。今では誰も星を見ていないようだ。公立学校で天文学を教わり、太陽までの距離が九千五百万マイルなどと学んでいるようだが、そんなことは私にはなんの意味もないことなのだ。そんな距離を私は歩いたこともないし、信じろと言われても信じることができないのである。しかし、それでも太陽は輝いているのである。(『日記五』447)

「馬車の御者」という表現は唐突のように思えるが、おそらく「人生の方向を決める」という直前の表現に掛けた言葉であつたろう。この一節は1853年1月21日の日記に記され、のちにエッセイ「月」としてまとめられソローの死後出版されている。「月」として改稿された文章には、「天文学者は、現象の意味あるいは無意味さについては盲目である。鋸を引きながら、木屑から目を守ろうと眼鏡をかけている木挽師のように」という一節も見られる。この一節は、あきらかに『ウォールデン』

7 Henry David Thoreau, *Walden*, Ed. J. Lyndon Shanley (Princeton: Princeton UP, 1971). 『ウォールデン』についての言及はこのプリンストン版に依るものとし、本文中に頁数を付した。

の中の一節「人はそんな衛星（海王星の衛星トリトン）の発見ができて、自分の目の中の塵は見出せないものだ」（51）と呼応しているのだが、これらの箇所を引用した小野は「天文学による新知識や情報が、そのままでは人生の糧になりにくいということ、また天文学者が客観的な事実のみを追求し、人間の生き方には全く無関心であること等に集約される」と解説する。⁸

ただここで注意したいのは、天文学と占星術との対比に見られる認識のあり方の違いである。おそらく、占星術の根底には神話的な世界観と感性が存在している。つまり、天体が客観的事実として認識されるのではなく、未分化の状態におけるより人間的な物語の体系が存在していたはずである。いわば、天体そのものの事実としてではなく、人間性の比喩として解釈されたのである。そうした比喩性にソローは最も関心を抱いたのではなかったろうか。

小野論文は、あくまでもソローの作品と天文学という科学との関連を探ろうとしたものだが、ここでは少し視点を変えて、天文学の比喩とソローの超絶主義的な認識がどう連結していたのかという問題について考察を加えたい。つまり、天文学の比喩を用いることで、自己の概念あるいは自己の内面性がいかに創成され、拡大されたのか、いわば天文学の比喩と“moral sublime”というロマン主義的な言説がいかに密接に融合していたのか、そうした問題について考察しようと思うのだが、超絶主義思想の影響に関してはまずエマソンの考察から始めなくてはならないだろう。

2 説教「天文学」から『自然』へ

新たな神学を求めて

ハーシェルの二つの著作『自然哲学序説』『天文学論』が発表されたのは、それぞれ1831年と33年であった。エマソンは前者の一部を32年に、そして後者を33年のヨーロッパ旅行中に読むのだが、ここで注目すべきことは、エマソンがその精神的な危機の時代にこれらの著作を読んでいた事実である。最愛の妻エレンの死、牧師職からの離脱、いわば旧来の神学から脱け出し新たな宗教観を模索した危機的な時代と一致していた

8 小野、7頁。

のである。ハリー・クラークは、エマソンが牧師職を辞した背景には天文学への傾倒があったと指摘するが、⁹ じっさい、天文学を含めた自然科学に対する関心と宗教形式に対する反発とはエマソンの問題意識の表裏をなしていたと言えるだろう。

より具体的に、ハーシェルの著作のどの部分がエマソンの思想に影響を与えたのかということについては推測の域を出ない。しかし、『自然哲学序説』の第1章に記された主張にはエマソンの自然観と共通する点が多く含まれていた。ハーシェルによると、科学は自然哲学の一分野であり、宇宙（自然）はカオスではなく法則によって秩序づけられた世界であると考えられた。つまり、そこには神（創造主）の意思が反映され、科学の対象は個々の現象ではなく、あくまでもその秩序を形成する法であるとされたのである。たとえば、第1章にはつぎのような指摘がなされている。

自然哲学の目ざすところの対象は、現象や個々の孤立した事実ではなく、原理であり法であることを、われわれは忘れるべきではない。真実はひとつで首尾一貫しており、原理というものは最も見慣れた単純な事実の中にも、また最も驚くべき常ならぬ現象の中にも完全に、そして明確に顕われるものなのである。¹⁰

前にも触れたように、ジョン・ハーシェルは文学の造詣も深く、次の一節に見られるようなシェイクスピアの言及にもエマソンは強く惹きつけられたのではなかったろうか。

科学的な探究心を身につけ、原理を生起する事象のなかにただちに応用する習慣を身につけた精神は、みずからのうちに純粹で刺激的な思索の尽きぬ泉を抱えていると言えるだろう。シェイクスピアが思索好きの人間を指して次のように描く時、そうした科学的な精神

9 Harry Hayden Clark, "Emerson and Science." *Philological Quarterly* 10 (July, 1931): 225-260.

10 John F. Herschel, *A Preliminary Discourse on the Study of Natural Philosophy* (1830; rpt. Chicago: U of Chicago P, 1987) 11

を思い描いていたと推察される。その精神が見出すのは、
木立に言葉、せせらぎには書物、
石のうちに説教話、すべての中に美德、である。¹¹

1833年9月、ヨーロッパ旅行中であったエマソンは、同年に出版された『天文学説』を船上で読み、その感動をこう表現していた。

ハーシェルの功勞によって、天文学はさまざまな可能性を約束してくれる。天文学は現状よりもさらに高い状態を私に示してくれるのである。いわば、物それ自体よりも物事の陰影部を考えることのほうが楽しいのである。（『エマソン日記四』238）

この一節は、エマソンにおける天文学の意義を考えるうえで、ある曖昧性を含んでいた。「物事の陰影部」（“the penumbra of the thing”）とは天文学によって導かれた「さらに高い状態」を意味する言葉であったろう。天文学という科学的な事実ではなく、その事実の背後にあるもの（たとえば、精神的な法則）を示唆する言葉であったと思われる。いわば、物理学（physics）に対する形而上学（meta-physics）の主張であり、科学的な客観性でなく超越論的な観念論に対する関心であった。つまり、この一節は、ハーシェルによって展開される天文学の思想的な可能性とその限界を同時に示唆していたのである。

エマソンはハーシェルを代表的知識人として崇敬するいっぽう、天文学者と「アメリカの学者」との間に微妙な距離を置いていたように思われる。1837年に書かれた「アメリカの学者」では、学者の自己信頼をハーシェルの人生と微妙に対比させる形で描いている。

フラムスティーデやハーシェルのような天文学者は、人々の善意に支えられて真新しい天文台で星のカatalogを作成している。成果は顕著で素晴らしく、有益である。おのずと名声も高まるというものだ。いっぽう、学者はプライベートな天文台で、まだ人の思いの及びもしない、臍げな人間精神の星雲のカatalogを作成しているとい

11 John F. Herschel, 11.

う訳なのだ。数日、いや数ヶ月もの間、ほんの二三の事実の発見のために観察を続け、過去のデータを修正しつつ、見栄も今日の名声も犠牲にしなければならぬ。いやさらに、世の中の芸事については無知無能ぶりに甘んじ、有能な人々の侮蔑を受け、つま弾きにされるという有り様である。(中略) あらゆる困難と侮蔑に対して、何の報いがあるというのだろうか。いや、かれは人間性のもっとも高貴な役割を果たしていることに慰めを見出すだろう。個人的な思慮から頭をもたげ、民衆のための素晴らしき思想を語り、そのために生きるのだ。かれは世界の目であり、かれこそ世界の心なのである。『エマソン全集一』101-2)

あきらかにエマソンにとって重要なのは、天文学の比喩性であった。天文学者が宇宙の広がりを探求するのと同様に、「考える人間」としての学者の役割は人間の「内なる宇宙」を探求することであったのだ。そして、この曖昧性——ハーシェルに対する賞賛と距離、事実と隠喩、科学と宗教——こそ、エマソンの天文学に対する興味の核心であったと言える。エマソンの思想において天文学は哲学の一分野と捉えられたのであり、天文学の新たな発見は神と人間精神を貫く法の発見と考えられたのである。天文学は「より高度な状態」を示唆するメタファーとして歓迎されたのだった。

結論を急ぐ前に、もう一度、エマソンにおける天文学への関心を、1832年に行なわれた「天文学」(“Astronomy”)という説教を中心に検証してみたい。

説教「天文学」

1832年5月26日、エマソンはハーシェルの著作に触発された天文学への興味を以下のように記していた。

天文学には優れた役割がある。まず最初に提起された問題がいかに示唆的かということである。果てしない空間が宇宙に広がっていると信じれるだろうか。このとてつもない考えをじっくりと思い描いても見給え。その空間においていかなる存在と集団もただの点に過ぎず、中心や天使の概念も宇宙のへりすら説明できないとしたら、

観念論のほうがより有効に思えないだろうか。偉大な夜の胸に抱かれて、すべてが失われてしまうからである。次に、天文学は人間の思上がった考えを修正するということである。(中略)天文学は着実に精神的な法則を築き上げるだろうし、一時的なシステムを拒絶し霧散させてしまうことになるだろう。時間の試金石にかければ、あらゆる誤謬は消え失せ、永遠の目には真理のみが行き渡るのである。(『エマソン日記四』25-6)

天文学という科学の進歩が従来の神学を是正し、新たな「精神的な法則」(moral laws)を確立するという思想は、エマソンの中に燦り続けていた聖職に対する深い懐疑を決定的なものにするとともに、超絶主義という新たな神学の萌芽を約束したと言えるだろう。

この日記の記述は、1832年に行なわれた「天文学」という説教に結実する。エマソンはこの説教において、まず、自然の創造者と聖書の神が同一のものであり、自然には神の「意図」が書かれたとする「自然の本」という思想を展開する。これは、17世紀の思想家 ウィリアム・ペイリーの「目的論的証明」(Argument from Design)に基づくもので、神の「意図」が創造物の「しくみ」に顕われるとするものであった。創造物に示された神の意図、つまり自然の「意味」は、その物理的な法則のなかに隠されていたのである。宗教と科学は矛盾するどころか同一のものであり、エマソンの言葉で言うと、「神の創造物への知識を深めることは、神の御言葉をよりよく理解する」¹²ことであった。

いわば天文学が約束したのは、不変の軌道 (orb) という現象によって示される法の概念であった。宇宙は神の「意図」によって秩序づけられ、法の支配する空間であった。法は同時にアイデアであり、宇宙の空間は人間の精神の隠喩と見なされたのである。

目に見えぬ同様の案内人がハチの軌道も、そして惑星の運行をも導いています。その案内人が全体を形成し、部分を完全なものにし、すべてのものに美と秩序と生命と役割を与えています。ですから、

12 Ralph Waldo Emerson, "Astronomy," *Young Emerson Speaks; Unpublished Discourses on Many Subjects* (Port Washington, NY: Kennikat P, 1968) 170-1.

皆さん、私はこう言いたいのです。人類にとって天文学の発見は自然の偉大さと人間精神の偉大さを和解させるものだ、と。かつて、神はこの世の統治者と見なされましたが、今では、神は無限の精神と感じられています。素晴らしく、讃美されるべき存在であり、その御心は愛に満ち、その叡智は人智の及ばぬものなのです。¹³

天文学による果てしない宇宙空間の発見は、人間の「精神の偉大さ」を予感させ、その起源としての神の「無限の精神」を約束した。この説教の特徴は、科学の進歩によって従来の神学の限界を指摘しながら、いっぽうで、ペイリーに代表される Argument from Design という旧来の思考の枠組みを借用したことであった。天文学の進歩によってもたらされたものは神の存在の否定ではなく、逆に、創造者としての神の偉大さであったのである。この説教のレトリックが「エレミヤの嘆き」を連想させるように、その内容も天文学という新たな題材を扱いながら、古めかしい結論に終止するものであった。「天文学による貴重な成果は、神に対するわれわれの考え方を修正し高めるものとともに、われわれ自身の見方を謙虚なものにすることでもあった」¹⁴。

「透明な眼球」の誕生

天文学という科学が超絶主義思想に与えた影響について考えるために、ここで説教「天文学」と『自然』との関係性を検討してみたい。『自然』は、周知のとおり、天体の描写から始められている。

孤独になるためには、社会ばかりか書斎からも身を遠ざける必要がある。読書や書き物をしているうちは、そばに誰もいなくても孤独にはならないものだ。孤独になりたいのなら、夜空の星を見ればいい。天体から届く光がかれの存在と手に触れる世界とを切り離す。この大気が透明であるのは、われわれに天体の中に崇高なものの永遠の存在を感じさせる意図があるからではないかとさえ思われるのだ。街中の雑踏からでも、いかに壮大なものに見えることであろう

13 Young Emerson Speaks, 176.

14 Young Emerson Speaks, 172.

か。もし星が千年に一度現れるものだとしたら、人類はいかに信心深く崇拝するだろうか。そしてそこに現れた神の国の思い出を数世代に渡って保ち続けることだろう。(『エマソン全集一』13)

孤独になるという振舞いは「崇高な存在」との合一を求めた宗教的な行為であったのだが、ここにおいて大切なことは視覚が認識の主要なメタファーとして前景化された事実である。光と目というエマソン特有のメタファーは、「透明さ」というもう一つのイメージと結びつけられている。社会から離れて孤独になることは、人間の感覚を「透明化」して、神の「意図」を明確化することでもあったのである。すなわち、この一節は、「卑しい自己執着は消え失せて、私は一個の透明な眼球になる」(『エマソン全集一』16)というあの有名な一節の雛形であり序曲であったと言える。夜空の星を見つめるのは「一個の透明な眼球」であった。

先に引用した1832年の日記の中で、エマソンは天文学者を「卵の殻をつけた目」(“a mere eye sailing about space in the eggshell”)と表現しているが、それは宇宙空間における人間存在の卑小さを示唆する表現であるとともに、1836年に出版された『自然』における「透明な眼球」(“transparent eyeball”)につらなる〈生まれたての目〉であると言えないだろうか。つまり、望遠鏡というもう一つの「目」を通して宇宙を見る天文学が、超絶主義思想の萌芽に決定的な影響を与えたと考えることはできないであろうか。『自然』に描かれた観念論が超絶主義思想の核心であるとするれば、時空を超えた「精神の法則」を直感的に把握する「理性の目」は、天文学者が宇宙の物理的な法則を発見した「永遠の目」と重なるだろう。「目と光を創り、この地球を透明な大気で被われた主は、創造された者たちに星を観察させ、その法則を書かせ給う。こうして主は、かれらの宗教を修正し、その心を訓育されるために、この天体を開かれ給うたのだ」¹⁵。

エマソンは『自然』の「唯心論」において、「理性の目」を「動物的な目」と対比的に描いていた。人間の感覚で捉えられた自然は、「理性の目」が開眼するやいなや消滅してしまうという超絶主義的な構図であった。ここにおいて、人間の悟性に対する理性、あるいは物質的な自

15 Young Emerson Speaks, 176-77.

然に対する精神的な法則の優位性という、『自然』に一貫して述べられた超越論の核心が語られるのだが、この構図はすでに32年の説教「天文学」にもその萌芽が見られたのである。

太陽系あるいはこの世の創造物に対する見方がどのように押し広げられようとも、真理、道徳的な真理、いやイエスが示し給う真理にはほんの少しの影をも落とすことはない。けっして影を落とすことはない。そればかりか、比較によってすべての明るさと偉大さは失せてしまうのである。人間の精神において、外の事象に心惑されているうちに突如声が聴こえるときがある。正しさを求める飢えであり渇きである。その御言葉は昼間にのぼる朝日のようなものだ。新たな天地が開けたのである。これまで偉大に思えた外なる創造物は色あせ、暗くつまらぬものに見えてしまう。たとえ新たな幾百万の太陽と銀河系が無限の闇の中に広がっていたとしても、問題にならぬのである。それは単に数字や規模の足し算に過ぎず、たとえどんなに遠く広がっていても、いのちが通わず、われわれの壮大な感覚に触れはしない。ひとつの勇気ある行為、愛、そして献身的な行動を前にして、あらゆる高度や距離というものは意味を持たなくなり、星たちはその輝きを減じるのである。これこそが唯一リアルなのであり、絶対的であらゆる状況と変化から独立しているのである。¹⁶

天文学は、たしかに人間精神の「偉大さ」を表すメタファーを提供したのだが、いっぽう、宗教的な真理はそうした科学的事実によって示唆される時間と空間を超越したものであることを、エマソンはこの説教の最後で指摘したのである。つまり、科学的な「事実そのもの」よりも「その事実の背後にあるもの」に対する関心であった。

3 天文学と超絶主義思想

内面の宇宙

アメリカロマン主義文学の特徴のひとつは、「自己」という概念によっ

16 Young Emerson Speaks, 178.

て創出された精神世界の広がり、内的宇宙の発見であった。少なくとも、エマソンによって創出された「自己」はエゴイズムや我執という〈閉じられた〉個性の対極に位置する、いわば、より〈開かれた〉普遍的な人格であり、自己のアイデアであったはずである。

ここで注目したいのが、ソローやエマソンらの著述にしばしばみられる「果てしない」(boundless) という形容詞である。「境界」(bound, boundary) を越えて広がろうとする精神のベクトルが“boundless”あるいは“expansion”という修辞表現に特徴的に表された事実である。超絶主義思想とは、文字どおり、あらゆる時空の制約を「乗り越え」ようにする思想であり、その一つのイメージとされ根拠とされたのが天文学による宇宙空間の発見であったと考えるのである。

ハーシュルの著作に触れたその感動を「果てしない (boundless) 空間が宇宙に広がっていると本当に信じることができるだろうか」と日記に記し、さらに天文学の発見が「自然の偉大さと人間精神の偉大さを和解させた」とエマソンは述懐したのだが、エマソンはあきらかに天文学による宇宙の「果てしない」広がりを、メタレベルにおいて内的宇宙の広がりとは重ね合わせたのである。「ある意味では、人生の目的はみずからの内に宇宙を取り込むことではないだろうか (中略) むこうの山がかれの精神に移動しなくてはならぬ。そしてついには彼方の壮大な天文学を移行させ、月、惑星、至点、周期、流星などそれぞれの関係と法則を理解することで心の中に取り込まなければならないのである」(『エマソン全集十』131)。

エマソンは人間の存在、特にその精神性の「果てしなさ」あるいは「境界」(限界) のなさをくり返し強調している。「人間の可能性に限界 (bound) など設けることができるだろうか」(『エマソン全集一』68) と問いかけ、さらに、人間の精神は「その始まりも終わりも見出すことができぬほど完全で、果てしない (boundless)」(『エマソン全集一』87) とくり返すのだ。「人間の生というのは自転する円のようなものであり、限りなく小さな円からあらゆる方向に放射され、新しいより大きな円を形成する。(中略) もし、魂が速く強ければ、あらゆる方角に境界 (boundary) を越えて溢れ出し、偉大な闇にもう一つの拡大された軌道を形成する」(『エマソン全集二』283-4)。

そしてこうした人間精神の「果てしなさ」の根拠とされたのが普遍者

との交流であったのだが、宇宙空間がその「神の御心」のモデルとされたことは想像にかたくない。さらに、天文学によって発見された宇宙の法則が、メタレベルにおいて、精神の法則として解釈されたことも事実であったろう。「人間精神の純粋な抽象である幾何学が、惑星の軌道の指標となることを天文学者は発見する」(『エマソン全集一』87)のであり、「詩人だけが天文学、化学、植物学、動物学を理解しているのは、かれがそうした事実にとどまるのではなく、その事実を記号として用いるからである。」「それこそが真の科学なのである」(『エマソン全集三』25)。文学が人生に新たな視点を与えるのは、「天文学者が地球の軌道の直径を知り、他の星との視差を見出す起点とする」のと同様である(『エマソン全集二』291)。

ここで確認しておきたいことは、「自己の拡大」というモチーフはこれまで19世紀における領土の拡張という帝国主義的な政治言説との関連で論じられてきたことである。たしかに、拡張する時代精神が文学的な修辞に表われたことは事実であったが、いっぽう、そうした政治言説が主流になる40年代以前にも、こうした内面の発見とその拡大が論じられたのであった。特に超絶主義者と呼ばれた知識人の間でそうした内的拡大が論じられていたのである。その背景には、宗教的なリベラリズムというもう一つの流れが存在し、その流れが政治言説と融合する形でこうした文学的な修辞を可能にしたのである。

認識のフロンティア

ウォールデンでひとり暮らしを始めた直後、ソローは「境界」というメタファーを用いてウォールデンの体験を語っていた。

私はときおり自分にふさわしい土地を見出したかのように、思いもよらぬ高揚感と長らく忘れていた満足感に満たされながら、野原を歩いたものだった。日常生活の境界(“the usual daily boundaries of life”)は消えさり、自分が立っている土地がどういうものか理解した。(「日記二」177)

「日常生活の境界」からの離脱は、ソローにおけるウォールデン体験の核心をなすテーマであったろう。それは社会的な価値観からの逸脱であ

るとともに、「思いもよらぬ高揚感」(“unexpected expansion”)を体験する啓示的な詩的体験でもあったはずである。ソローの言葉をくり返し引用するとすれば、「現実の境界というのは、想像力の柔軟さほどにも固定したものでも硬直化したものでもなく(『日記六』162)、「目に見えぬ境界を通り過ぎると、新しく普遍的で、より自由な法則が心のうちにも身の回りにも確立し始める」(『ウォールデン』323)のであった。「宇宙はわれわれが考えているより広大で」あったのだ(同320)。

ここにおいて注目したいのは、「現実の境界」はしばしば言葉によって創られ、反復される事実である。反復される言葉の壁を打ち破ることなくしては、「認識の境界」に到達することも、真実の表現を見出すこともできなかったのである。ソローが「誇張」(extravagance)という修辭によって意図したのは、「現実の境界」の束縛から離れて、真実を語ることであったのである。

私がおもに恐れていることは、私の表現が十分に誇張的でなく、日々の経験の狭い枠組みを越えて自由にさまよい、私が確信した真実に相応しいものとなっていないのではないか、ということである。枠を越えて行くこと。それはあなたがどれだけ囲われているかにも依る。(中略)私は境界などないところで話をしたいと思う、目覚めた瞬間の人間が目覚めた瞬間の人間に語りかけるように。(同324)

ソローの場合、「現実の境界」の向こうに何があるのかという問いは、本質的な問題ではなかった。むしろ、「現実の境界」を押し広げ、あるいは相対化することにより、新たな世界との関係を築くことこそ重要であったのだ。「冒険を求め」(同207)、「自分自身を探検すること」(同322)によって、「世界全体がアメリカ、つまり新世界になる」(『日記四』421)ことを願っていたのだ。

『ウォールデン』の「結論」の冒頭にはウィリアム・ハビントンの詩が引用され、自己の「内なる宇宙」が強調されている。

あなたの目をまっすぐに
内側に向けよ。そこにはいまだ発見されぬ

幾千もの大陸が横たわる。

旅人となれ、

そして、内なる宇宙の達人となれ。（『ウォールデン』320）

「内なる宇宙」（“home-cosmography”）という言葉によって示唆されたものは、人間の内面の無限の広がりであり、さらに「外なる」空間に対する優位性であった。ソローはさらにこう続けている。

あなた自身のより高い緯度の領域を探検しなさい。（中略）いや、あなたの内面にあるいくつもの新大陸や世界を発見するコロンブスになりなさい。そして金儲けではなく、思考の水路を切り開きなさい。ひとり一人の人間はそれぞれが一国の君主であり、それに比べると、この世のロシア皇帝も小さなつまらぬ領土をもつ帝国にすぎず、氷のかけらほどのものでしかない。（同321）

ここでは空間の広がりがある内面性を創出する比喩として用いられたのだが、実際には、自己の精神によって物理的な空間が超越される可能性を示唆していたように思われる。

アメリカ超絶主義思想の核心が観念論的思考（idealism）にあったことは今さら確認する必要はないであろう。『ウォールデン』の「結論」に描かれたクールの芸術家の挿話は、美の観念が時空の制約を超えて永遠性を獲得するという超絶主義の寓話であった。「神は現在の瞬間にこそ顕現される」（『ウォールデン』97）という言葉に示唆されるように永遠性の観念は瞬間に感知されるのだが、他方において、こうした啓示の体験はしばしば宇宙的な空間と時間の比喩表現を必要としたように思われる。エマソンやソローの文学において提起された「自己」は観念論に支えられた中心性を基軸としながらも、そこに豊かな内面世界のひろがりの比喩を必要とした。いわば、「自己」という概念によって人間の内面の無限の可能性と「果てしない」空間が創出されたのだが、その比喩表現が形成された背景には天文学という科学によって発見された宇宙の広大な空間概念が存在したと言えるのである。